ことしもまた、新たな縁（えにし）を結ぶ会 '12！

2012.4.21 SAT.　プレスセンターホール＆スタンダード会議室

13:00　開会
13:05 ～ 14:15

◆第１部　濃縮シンポジウム「いろんな人が生きられるまちに」

★「塀の中」でオムツ交換して日本の福祉の現実に出会った 元国会議員　山本譲司さん
★ リハビリ革命を起した「夢のみずうみ村」の　藤原茂さん
★「病院で死ぬということ」⇒ホスピス⇒在宅ホスピス⇒まちづくり と広がる　山崎章郎さん
☆ 世田谷区長として、23 区から日本を変えようとする　元国会議員　保坂展人さん
コーディネーター：朝日新聞デジタル編集部次長の高橋美佐子さん

14:15 ～ 14:45　♪ えにしむすびたい・む ♪

14:45 ～ 16:30

◆第２部　濃縮シンポジウム「東日本震災で、まだ、本気では語られていないこと」

★ 耳の不自由な被災者救援に駆け回った全日本ろうあ連盟事務局長　久松三二さん
★ 阪神大震災の経験を東日本支援に活かした
神戸アイライト協会長でご自身も盲の　新阜義弘さん
★「支える人を支える」ために、縁の下の力持ちを続ける
全国コミュニティライフサポートセンター理事長の　池田昌弘さん
★ 広島・長崎・チェルノブイリを長期継続調査した長崎大名誉教授　長瀧重信さん
コーディネーター：毎日新聞編集委員の小島正美さん

♪えにしを結びつつ、移動して♪

17:00 ～ 20:00

◆第３部　大討論会「どう変える～日本のすべての人の未来～社会保障と税の一体改革をめぐって～」

★菅政権時代、野党から、社会保障・税一体改革担当大臣に迎えられた　与謝野馨さん
★社会保障改革に関する有識者検討会座長をつとめた　北海道大教授の　宮本太郎さん
★こども支援分野を代表して　子育てひろば全国連絡協議会理事長の　奥山千鶴子さん
★障害のある人を代表して　聴覚障害と視覚障害をあわせもつ東大教授　福島智さん
★診療報酬と医療政策の観点から　中央社会保険医療協議会　森田朗さん
☆若者を代表して　篠原雄之さん
☆「よりそいホットライン」を開設して日本の崩壊に愕然とした 宮古の前市長 熊坂義裕さん
☆厚生労働省 社会・援護局長 山崎史郎さん
☆内閣府政策統括官（共生社会政策担当）兼自殺対策推進室長　村木厚子さん
そして、フロアから、次々と。。。
コーディネーター：讀賣新聞社会保障部次長の猪熊律子さん

総合司会
太田美智子さん…国際医療福祉大学大学院医療福祉ジャーナリズム院生
金谷勇歩さん……国際医療福祉大学大学院医療福祉ジャーナリズム院生

縁……絆……縁……絡……縁……紡……縁……編……縁……網……縁……繋……縁……繰……縁……糺……縁

第１部　山本譲司さん

塀の中の現実に見る 我が国の福祉
―刑務所が福祉の代替施設でいいのか―

１．刑務所の現実および福祉の現実

・刑務所内に溢れる障害者や高齢者
・さらに多い発達障害をともなう受刑者
　――彼らの場合、刑務所内の日常生活のなかでは、その障害が顕在化しないことが多い
・「刑法三十九条によって、精神障害者や知的障害者は罰せられない」という一般的先入観の誤り

２．今後 取り組むべき福祉的課題、そして司法改革

① 現状の改善に向けて

・塀の中への入口を担う司法関係者への要望
　―― 知的・発達障害者が関わる刑事裁判のあり方を見直すべき（アメリカ・イリノイ州のような刑事裁判制度の導入など）
・塀の中の処遇改善
　―― 社会復帰に向け、それぞれの知的・発達障害者に適応したきめ細かな更生プログラムの導入
・医療、福祉スタッフの増員
・刑のバリエーションを増やす

② 出所後の社会復帰に向けて

・更生保護に求められる福祉的視点
・受刑者の社会復帰に向けた更生を考えるならば、刑務所の中だけを変えても仕方がない
　―― 法務省矯正局と保護局との連携、さらには厚生労働省や文部科学省との連携強化
・参考とすべき、オーストラリア・ビクトリア州における福祉サイドの取り組み

③ 2006 年に発足の厚生労働省「罪を犯した障害者の地域生活支援に関する研究班」の提言およびその後の制度改革

・地域生活定着支援センターについて
・矯正・更生保護分野における福祉専門職の活用

④ 変わりゆく刑務所・更生保護施設

・社会復帰センター（半官半民の刑務所）における特化ユニットについて
・刑事司法分野への社会福祉士への配置

３．何よりも求められる市民の意識改革

2003 年 12 月 ポプラ社（現在は新潮文庫）

■矯正統計年報より

表Ⅰ【新受刑者 入所年度別 精神診断】

調査区分	総数	精神障害なし	知的障害	人格障害	神経症	その他の精神障害	不詳
平成 16 年	32,090	30,085	271	141	322	1,250	21
平成 17 年	32,789	30,608	287	125	435	1,304	30
平成 18 年	33,032	31,223	265	103	345	1,060	36
平成 19 年	30,450	28,719	242	109	253	1,116	11
平成 20 年	28,963	26,887	237	161	387	1,214	80

表Ⅱ【年度別 新受刑者の知能指数】

	総数	49 以下	50 ～ 59	60 ～ 69	70 ～ 79	80 ～ 89	90 ～ 99	100 ～ 109	110 ～ 119	120 以上	測定不能
平成 16 年	32,090 (100%)	1,241 (4%)	2,053 (6%)	3,878 (12%)	7,159 (22%)	8,802 (27%)	5,399 (17%)	1,565 (5%)	248 (1%)	58 (－)	1,687 (6%)
平成 17 年	32,789 (100%)	1,351 (4%)	1,937 (6%)	4,102 (13%)	6,998 (21%)	8,574 (26%)	5,670 (17%)	1,783 (5%)	287 (1%)	52 (－)	2,035 (6%)
平成 18 年	33,032 (100%)	1,349 (4%)	1,974 (6%)	4,240 (13%)	7,501 (23%)	8,305 (25%)	5,647 (17%)	1,883 (6%)	303 (1%)	65 (－)	1,765 (5%)
平成 19 年	30,450 (100%)	1,233 (4%)	1,702 (6%)	3,785 (12%)	7,265 (24%)	7,656 (25%)	5,042 (17%)	1,810 (6%)	293 (1%)	59 (－)	1,605 (5%)
平成 20 年	28,963 (100%)	1,232 (4%)	1,742 (6%)	3,729 (13%)	6l726 (23%)	7,039 (24%)	4,970 (17%)	1,757 (6%)	288 (1%)	53 (－)	1,427 (5%)

注・( ) 内のパーセンテージは小数点以下 四捨五入の数字

表Ⅲ【平成 20 年 新受刑者の入所回数】

	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目	5 回目	6 ～ 9 回目	10 回目以上
全体	46.1%	17.7%	10.6%	6.9%	4.7%	9.4%	4.6%
知的障害者	29.3%	16.1%	14.5%	10.3%	7.9%	11.2%	10.7%

＊表Ⅰ 表Ⅱ 表Ⅲは、いずれも法務省発行の「矯正統計年報」(平成 21 年 7 月 31 日発行) より

表Ⅳ【平成 20 年 出所者の帰住先】

総 数	父 母 の 元	配偶者の元	兄弟・姉妹の元	その他親族	知 人 の 元	雇 主 の 元	社会福祉施設	更生保護施設	そ の 他
31,680 (100%)	9,765 (30.82%)	3,292 (10.39%)	1,858 (5.86%)	1,252 (3.95%)	2,461 (7.77%)	297 (0.93%)	77 (0.24%)	4,141 (13.07%)	8,537 (26.71%)

※「矯正統計年報」より

表Ⅴ【各国受刑者の高齢者率】

日 本	フランス	イギリス	ドイツ	アメリカ
14%	3.2%	2.8%	2.6%	3.1%

注・アメリカは 55 歳以上、その他の国は 60 歳以上の受刑者率

第１部　山崎章郎（ふみお）さん

看取りは文化－地域再生の原点に

■ホスピスで学んだこと

- 苦痛症状緩和の大切さ（WHO 方式など）—医療
- インフォームド・コンセントの大切さ－医療
- ボランティアとの協働の大切さ
- 生きる意味を見失ってしまった人びとへのケア（スピリチュアルケア）の大切さ
- グリーフケア（悲嘆ケア）の大切さ

■ケアタウン小平

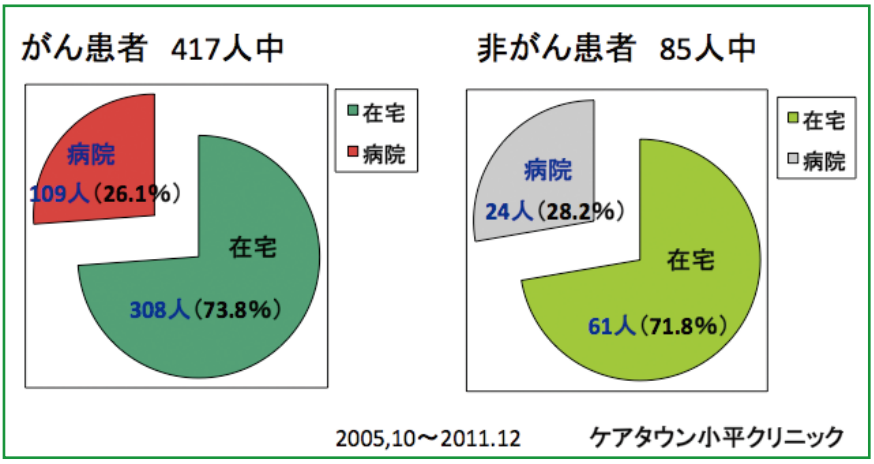
１階

在宅療養支援診療所、訪問看護ステーション
居宅介護支援事業所、ヘルパーステーション
デイサービス、ボランティア拠点
子育て支援拠点など

２階・３階
いつぷく荘：賃貸ワンルーム 21 戸

デイサービス送迎範囲：2km
クリニック訪問範囲：３～ 4km
訪問看護ステーション訪問範囲：3km

■死亡患者　死亡場所　内訳



■場の持つ力

１．苦痛を軽減する
２．変容する家族の力
　ケアタウン小平在宅遺族会
　「ケアの木」誕生

ケアの木かたろう会

ケアタウン小平スタッフ・ボランティア交流会

みんなの願いを大空へ

被災地支援花を見る会
いつぷく荘、デイサービス、ご家（遺）族、
スタッフ、ボランティアの皆さん

文化・スポーツ倶楽部事業
アロマセラピー、豊かな庭づくり事業
各種セミナー及び講演会
地域交流などの企画・運営事業
子育て及び子供の教育に関する相談支援事業

安心して暮らせるコミュニティは・・・

最期まで住みたいコミュニティ

たとえガンの末期であったとしても、

認知症であったとしても・・・

最期まで、人権を守られ、

尊厳と自立（自律）をもって暮らせることを

保証するコミュニティである。

（ケアタウン小平クリニック　山崎章郎）

第１部　藤原 茂さん

バリアありで自立を促す

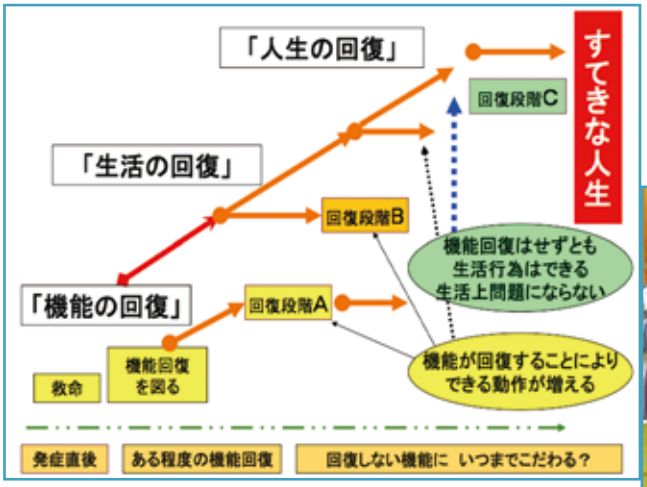
■夢のみずうみ村　１０のポイント

1．緊張を生まない環境づくり
2．施設内は社会の縮図
3．バリアありのすすめ
4．環境の仕掛けで移動能力リハビリ
5．自己選択・自己決定方式のプログラム
6．重度・軽度の対象者の混在化を防ぐ
7．『生きがいづくり』のコツは感情を揺さぶる
8．当事者ケアとスター制度
9．食べることを重視する
10．「宅配ビリテーション」を知る

■弱くない生き方をするとは「意思」を循環させることです

■緊張を生まない環境づくり

■弱くない生き方　「3つの回復」



■移動のリスクに自由度は比例

■ ONE STEP ONE GOODS 環境

ONE STEP ONE GOODS 環境

一歩先に、さわるもの すがるもの 寄りかかるもの
が 必ず最低1つ以上ある環境

杖や車椅子はなくても大丈夫な人は使わない
ステップ（歩幅）が狭い方は杖をついてOKですよ

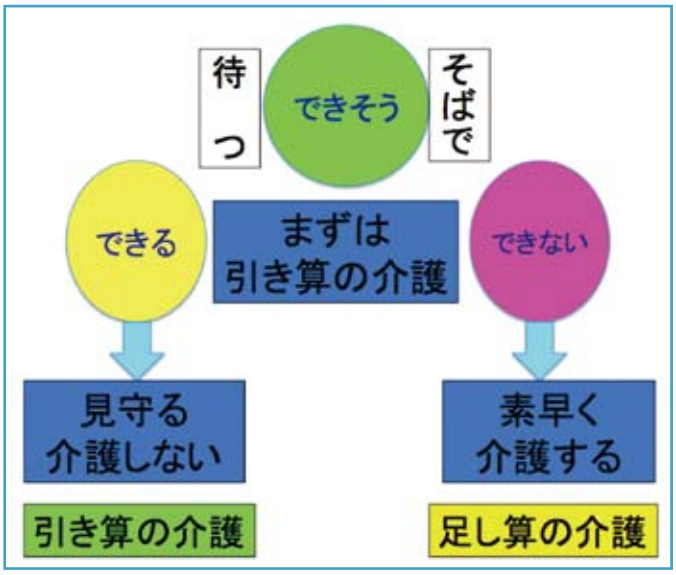
手すりをもうけない
（上肢依存型からバランス二の足依存型に）

家具の間をもたれかかり移動
壁のよりかかり移動の重視

■宅配ビリテーション

■バイキング方式

■まずは引き算の介護



■自立された方が働く
就労支援事業所「夢結び」

朝日新聞　２０１２年２月１７日　夕刊　１２ページ　東京本社

村木さん、賠償金を寄付

「光当たりにくい人々へ」

出所した障害者支援

郵便不正事件で無罪判決が確定した村木厚子・厚生労働省元局長(56)＝現内閣府政策統括官＝が17日、国側が違法捜査の責任を認めて支払った賠償金を、社会福祉法人「南高愛隣会」（長崎県雲仙市）に寄付することを明らかにした。

同会は、刑務所を出所した知的障害者らの社会復帰を支援している。賠償金約３７７０万円から、弁護士費用を除く約3千万円を寄付する。村木さんは「国民の税金を、最も光が当たりにくい人々のために使いたい」と話している。

村木厚子さん

村木さんは無罪判決確定後の２０１０年12月、事件の真相を明らかにしたいと国などを相手取り、起訴による休職で失った給与や慰謝料など約４１００万円の損害賠償を求めて提訴。国側は請求の大部分を認め、賠償金を支払った。

村木さんは、「お金が欲しくて提訴したわけではないので、公のために使うつもりだった」と話す。「知的障害者の取り調べや裁判に、専門家がかかわる制度がないのは問題だと思っていたが、刑事・司法制度の不備が浮き彫りになった今回の事件の後、詳しく調べるうちに放置できないとわかった。知的障害者や認知症の高齢者、少年らが、社会に居場所がないために罪を重ねないよう支えたい」としている。

同会は、刑期を終えた知的障害者や高齢者らが、行き場がなく再び刑務所へ戻るケースが後を絶たないとして、社会復帰を支える更生保護施設を運営する。

今回の寄付を原資に3月、同会に基金を設立。こうした人々の自立を支援する活動や、知的障害者の取り調べに専門家が立ち会う制度の研究などに役立てるという。

（高橋美佐子）

朝日新聞　2011年1月1日　朝刊　39ページ　東京本社

少女のような目の母と

94歳の母里津子さん（左）に大きな声で話しかける森谷康裕さん。食品雑貨店を営みながらの介護が続く＝東京都葛飾区、仙波理撮影

孤族（こぞく）の国　第1部　男たち　6

息子介護の本音 言えた

居間のかもいに、額縁入りの賞状が並ぶ。米寿の祝いなどに贈られた「寿状」は、亡父あても含めて3枚。94歳になるベッドの上の母を、静かに見下ろす。

介護保険で、最重度より一つだけ軽い「要介護4」。週1の訪問入浴を済ませ、おぼつかない手つきでコップを口元へ。「あっ、こぼすよ」と慎てて近づく長男を、少女のように澄んだ目で見つめる。

森谷康裕さん(66)は父が逝った10年前から、母里津子さんと2人きりで暮らす。東京都葛飾区にある築39年の木造2階建てで小さな食品雑貨店を営む。

昨年、母の左太ももの骨折がわかったが「もう治せない」と医者に言われ、ほぼ寝たきりになった。耳が遠くなり、終日つけっぱなしのテレビの音も聞こえているかどうか。最近の会話は「今」と「過去」が入り乱れる。

そんな母との生活を「自営だから良かった」と思う。お兄ちゃーん、と呼ばれれば、すぐ飛んでいく。親類の消息を問われても「あの人、もう死んじゃったでしょ」と耳元で何度でも正してやれる。

いつの間にか居着いた猫が、ひだまりの部屋を通り過ぎていく。

4人きょうだいの一番上だった森谷さんは、高校を中退して16歳で、同親の店を手伝い始めた。すぐにオート三輪を買い、毎朝6時に市場へ。父が作るきんぴらや煮豆は評判で、年の瀬になれば自家製の「お節」を買いに来る常連客を、親子3人でさばいた。

30歳過ぎで見合い結婚したが、1年足らずで破綻した。「サラリーマン家庭みたいに決まった休暇が欲しいと言われても、ね」

時代は流れ、街は変わる。駄菓子の売れ行きが落ち、主婦は消費期限が表示されたパックの総菜を好むようになった。常連客は老い、店の前を通り過ぎる人々は向かいの駐車場付きスーパーへ吸い込まれていく。

忘れられた孤島のような商店の陳列棚に品物は少なく、閉店セール最終日のようだ。

森谷さんはほとんど外出せず、毎日3度の食事を作って母に食べさせ、おむつを替えて寝かしつける。独身の弟(58)が週2回は顔を出すが、妹たちはあまり来ない。「旦那や孫の世話で忙しいんだろう」。ため息がもれる。

2人の時間は、10年前から止まっているかのようだ。だが、母は卒寿を過ぎ、自分も高齢者と呼ばれる年齢に達して、同じ病院に通う。10年後、一体どんな暮らしが待つのか、考える余裕はない。

「車いすにさえ乗せられれば、日帰りでも連れ出してやれるんだけど」。そう言いながら、2年前の旅行の写真を手に取った。隣接の老夫婦を背にした母は、少し不安げに、こちらを見つめている。

残業を終えて帰宅すると、母は出走直前の競走馬のような目をしていた。明け方まで続く徘徊の前兆だ。「向こうに行ってろっ」。思わず頭をたたくと、みるみるうちに白髪が鮮血に染まった。急いで病院へ。「次は通報します」と医師は言った。

数年前のことだ。

鈴木宏康さん(51)は独身で、アルツハイマー型認知症を患う82歳、要介護3の母を介護する。川崎市の築30年を超す分譲団地の4階、3LKで2人の生活を続ける。

電機メーカーの下請け会社を辞めたのは46歳。リストラ含みの配置転換で嫌気がさしていたとき、母の病状が悪化した。四六時中、部屋を動き回って、独り言を繰り返す。水道の蛇口は開けっぱなし。そばを離れられなくなった。

最初はアルバイトに出るつもりだった。でも面接で「欠勤しないで」と言われれば諦めるしかなかった。昼間預かってくれるデイサービスの利用料を差し引けば、時給は実質275円。施設に入れる貯蓄もなく、母の年金で暮らそうと決めた。

生活は想像を絶した。

力任せに玄関ドアをたたき続ける母を部屋にとじめておけず、昼も夜も背後から追って、何〝も歩き続けた。たびたび行方不明になり、連絡を受けては連れ帰る。やむをえずデイサービスに預けた晩は、興奮して大暴れ。地域のケアマネジャーに懇願をこぼすと「育ててくれた親でしょ」と言われ、心が折れそうになった。もう二度と行政には頼るまい、と決心した。

たまに元同僚や友人から飲み会へ誘われたが、断った。苦しい胸のうちを訴えたところで何になるのか。そもそも母を置いて外へ出られない。周囲に壁を築き、2人だけで閉じこもるような日々。

ボランティアの女性(63)が訪ねてきたのはこの頃だ。「気になる親子がいる」というケアマネらの訴えで母子を見にきた。片時も離れず寄かぬ母の横で、ふてくされてたばこを吸い続けていると、集まりに顔を出して、としつこく誘われた。足を運ぶうち、「本を書いたら」とすすめられた。

2人きりの閉じられた空間に、少しずつ新しい空気が入っていく。

日記を書いたこともないのに真夜中、パソコンに向かった。2009年、単行本「息子介護」を出した。つたなくも過敏な表現で、孤立無援な日々に正気を失いかける心境をつづる。「自分自身の人権なんて言ったら、介護なんてできない」「目にいく度か心の中で殺すのです。お袋を」

単行本は話題を呼んだ。同居の親をみる無職の独身男性の「本音」を聞きたいと、介護職や行政担当者らが続々とやってくる。介護関係者の会に誘われることも増えた。

鈴木さんは気が向くと、母を連れて、そんな会に参加する。「キャバクラに行く方がいいに決まってます」などと憎まれ口をたたきながら。

（高橋美佐子）